# 空の瞳

---

愛してると、言った。そしてサヨナラと。

## 1

バーの手前で強く踏み切った直後に、ふわりと体が自由になる気がする。
背負っている重たいものをすべて投げ出して、体をひねり、睨みつけたバーを越す。その瞬間、一瞬だけ空をとても近くに感じる。

「クリア！」

そんな誰かの声を聞きながら、ドサッとマットに体を沈み込ませて、悠哉はほっと息をついた。目の前に広がる空が、ひどく青い。

「1メートル72か。……もう2、3センチは余裕で跳べそうだな、笹辺」

寝っ転がったまま、そんな声のした方に目を向けると、背の高い人物がこちらを見下ろしている。悠哉はちょっと眉をひそめた。それがあまり相性のよくない、陸上部の先輩だったからだ。

早くどけーと次の選手からせかされて、バランスの取りづらいマットの上で身を起こし、地面に降りる。
そして、瀧川将人という名の長身の二年生の前を、ペコリと会釈をして通り過ぎた。
その途端、予想通り瀧川が皮肉な笑みをよこす。

「きれいな顔に、成績優秀、しかもスポーツ万能か。そこまでオールマイティだと胡散臭いな。おまえ、何か弱点ないのかよ？」

　悠哉はムッとして瀧川を睨んだ。そもそも瀧川は長距離の選手のはずなのに、なぜわざわざ運動場の端まで来て、高跳びの練習にちゃちゃを入れるのだろう。四月に入部してから半年あまり、毎度のこととはいえ辟易していた。

　さっさと校外コースでも走りに行けと思いながら、とりあえずはおとなしく首を傾げてみせる。

「さあ……」

　はぐらかしてそのまま立ち去ろうとしたが……ふと思いついて、悠哉は瀧川を睨む。にっこりと、唇だけで笑んだ。

「探して、みますか？――――俺の弱点」

　何の気なしに言った、その一言が始まりだった。

◆　◆

「また来てたぞ、2Dの瀧川さん」

　昼休みが終わる少し前に席に戻ると、前の席の戸田久志が振り返って言った。
　またか、と思いながら、悠哉はがっくりと席に着く。机の中から次の授業の教科書を探し当て、バラバラと意味もなくめくった。

「……で、何だって？」

「さあ。職員室に行ってるって教えたら、じゃあいいってさ」

「あ、そ」

　瀧川は最近、頻繁にこの1Bの教室に顔を出していた。嫌でも部活で顔を合わせるのに、わざわざ教室まで来られるのは迷惑以外の何物でもなかったが、そもそも悠哉が瀧川を煽ったせいなのだから、自業自得と言われればそれまでだ。

　弱点、探してみますか？

　どういうわけか、瀧川は面白がってその提案に乗った。その結果、悠哉は苦手な瀧川につきまとわれる羽目になったのだ。墓穴、というヤツだろう。

「おとといは、部活の帰りでクタクタなのに引っ張って行かれて、焼鳥屋で変なもの食わされるしさ。……その前は、沖縄料理だったかな」

　悠哉がぼやくと、久志はこらえ切れず笑い出す。

「まずは、苦手な食べ物ってわけか。おまえ、何か嫌いなものあるの？」

「んー……食えないほど苦手なものは別にない」

　だいたいは瀧川のおごりだからまだいいが、最近、妙なものばかり食べさせられて胃がおかしくなりそうだ。結構ですと食べるのを拒否すれば、

「苦手だな？」

　と決めつけてくるので、出されるものはとにかく無表情に食べ尽くしていた。

「それにしても、すごい人と張り合ってるよな、おまえ」

　唐突に久志がそんなことを言い出す。いったい何が、と目で聞くと、久志はちょっと呆れたように眉根を寄せる。

「清鳳学園の瀧川将人っていったら、高校陸上界じゃあちょっとした有名人だろ。インターハイ、2位じゃなかった？」

「へえ……よく知ってるな、久志」

「おまえこそ、陸上部のくせに何で知らねーの」

「別に俺、陸上好きなわけじゃないから」

　面倒臭げに悠哉が答えると、久志がちょっと驚いたような顔をした。その時ちょうど本鈴が鳴り、数学

教師が教室に入って来たので、その話題は宙に浮く。

悠哉は頬杖をついて、窓の外を見やった。

陸上が、好きなわけじゃない。ただ跳ぶことが好きなだけだ。あの空に、少しだけ近づけるから。